



# 営農情報

第59号 平成29年5月9日

## 「あまおう」5月の管理

南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 生産販売状況

3月上旬から3番果房の収穫が出揃い、3月下旬から4月上旬にかけて出荷ピークとなりました。4月中旬は昨年並みの出荷量で、4番果房も比較的連続しており早いところでは収穫が始まっています。単価は4月は昨年よりやや高く推移しました。(図1)

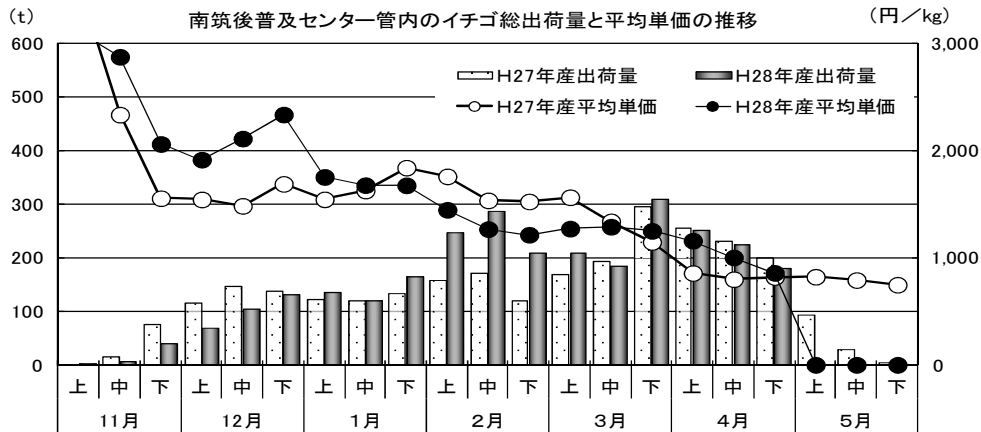


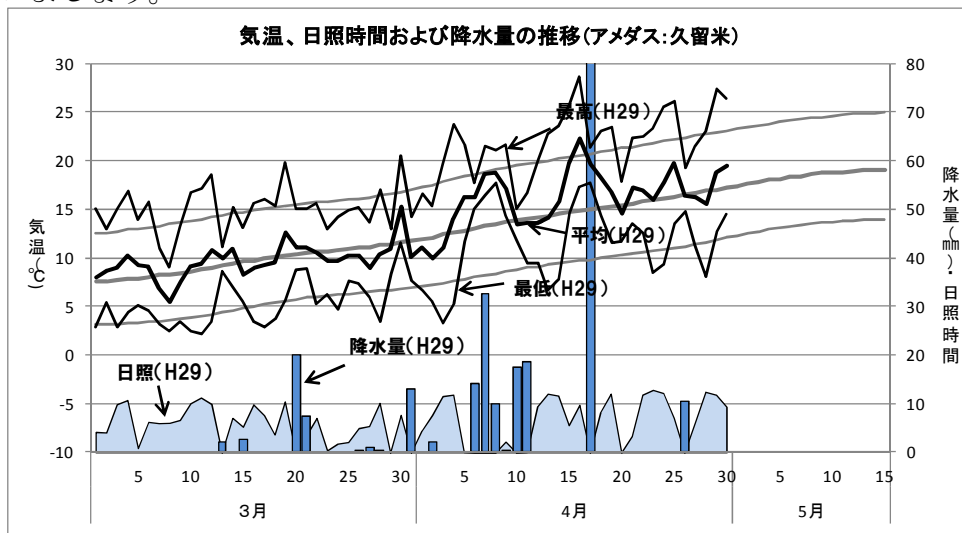
図1 南筑後普及センター管内のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

### 親株の状況

最低気温が低く(図2)日照時間も少なかったことから親株の生育が遅れ気味となり、花蕾除去等が遅れたほ場ではランナー発生の遅れが見られます。今後の気温は平年並みか高い見込みで、降水量は少ない予報となっています。降雨の少ない乾燥した期間が続く場合は、ランナーの発生が停滞する可能性があるため注意が必要です。

病害虫については、アブラムシ、ハダニ類、アザミウマ類の発生が確認されています。

また、炭そ病は、高温多雨の気象条件下で感染のリスクが高まりますので、定期的な防除を行いましう。



気象データ (アメダス久留米より)

## 本ほ管理

### <軟果・傷み果対策>

- 収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守する。収穫日の間隔は短くする。
- サイド・谷・妻面を開放し、換気を充分に行う。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、直ちに低温の場所に移す。
- 収穫前日のかん水は避け、収穫後の少量多回数かん水に努める。  
(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7~1.8、軟果が多い場合は2.0程度)

## 親株管理

親株の乾燥や肥料切れ並びに不必要な下葉及び花蕾の除去の遅れは、生育の遅れやランナー発生の遅れに繋がる。

### <ランナー発生促進>

- こまめなかん水と施肥を行う。  
特に、プランターは乾燥しやすいので、株元にかん水チューブを設置し、確実に株元にかかるようにこまめにかん水する。また、5月上旬までにIB化成S1号を5~10粒/株施用する。

### <下葉かきと花蕾除去>

- 不必要な下葉及び果梗(花蕾)は、早めに除去する。  
ランナーの発生を促進するために、親株の負担を軽くする。

### <ランナー配置>

- 風雨によってランナーが1か所にかたまってしまうと子株が徒長するため、ランナーをバラけさせる。また、通路側に出ているランナーを適当な方向に配置する。

### <病害虫対策>

- 「炭そ病」は予防散布の徹底が重要。  
1枚展葉する毎(7~10日毎を目安)に定期的な予防散布を行う。  
「炭そ病」は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。  
28年度産で「炭そ病」が発生したほ場では、親株も感染している恐れがあるので、「うどんこ病」と併せて定期的な予防防除を行う。
- 今後、「うどんこ病」や「カキノヒメヨコバイ」の発生が懸念されるため、適期防除を行う。
- 雨よけ栽培を行う場合は、風通しを良くして多湿にしないよう注意する。

## 育苗準備

### <育苗床の環境>

- 育苗床は、風通しが良く浸冠水のない排水良好な場所を選定し、万全な排水対策を行う。
- 苗の徒長防止や「炭そ病」予防のため、ポットの中心間隔を18cm程度確保できるように、育苗床は十分な広さを確保する。
- うねは、中央部をやや高くし(かまぼこ状)、水がうね上に溜まらないようにする。
- 床面には古ビニルを敷き、さらに、ポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

## <育苗培土>

- 培養土は、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- 培養土量の目安は、8,000 鉢当たり 3.5 寸ポットで 4 m<sup>3</sup>、3 寸ポットで 2.5 m<sup>3</sup>とする。
- 「炭そ病」が発病した場合に、発病株及び周辺株を除去出来るように、**苗本数は3割程多めに準備する。**

## <鉢上げ>

### 【さしポット】

- マルチフィルム上に稲ワラ被覆を行った後（図3）、かん水施設を設置し、採苗1週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- 乾燥状態では、親株の生育やランナーの発生が抑制されるため、十分なかん水でランナーの発生を促す。
- 作型に応じて目標とする鉢上げ時期（6月上中旬）までに作業できるように、育苗ポットの準備を計画的に行う。



図3 全面マルチ+稲わら

### 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

### 【すけポット】（図4）

- 根がこぶ状になった苗を鉢に受け、ランナークリップ等で止める。
- 大き過ぎる太郎苗は鉢上げせず、全葉を除去する。
- ランナーが、極端に細い子苗は使用しない。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないようにかん水を行う。
- 鉢受け作業前後の「炭そ病」防除を徹底する。
- 鉢受けは、5月末までに終了する目標で行う。
- 鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。



図4 すけポット

※充実した苗を作るには、採苗時期が遅れないようにする。

そのためには、計画的に早め早めの作業を行うことが重要

## 特集「カキノヒメヨコバイの生態について」

H27年産の育苗から、カキノヒメヨコバイ（図5）の被害を受けたほ場が多く見られるようになりました。

しかしカキノヒメヨコバイの生態については、ハダニやアブラムシ等の害虫に比べてあまり知られていません。

そこで、これから発生が予想されるカキノヒメヨコバイの生態について紹介します。



図5 カキノヒメヨコバイ（成虫）

### <カキノヒメヨコバイの被害>

カキノヒメヨコバイが新葉から1～2枚目の展開葉を吸汁すると、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲症状などが発生する。被害が発生した株は、生育が抑えられる（図6）。



図6 変色、変形した被害葉

### <カキノヒメヨコバイの特徴>

ヨコバイ科、体色は黄緑色で体長は3mm程度。イチゴでは育苗期に発生し、苗の上部を手ではらうとピョンピョンと飛ぶ。

### <カキノヒメヨコバイの生活環>（図7）

- ツバキ、サザンカ等の常緑樹の葉裏で成虫が越冬する。
- カキが萌芽、展葉を始める4月からカキの新芽に飛来して産卵する。
- 徐々にイチゴの親株や苗でも発生が見られるようになり、6月から8月頃まで寄生による被害を受ける。
- カキ、ナシ、アジサイ等に寄生するため、ほ場周辺にこれらの樹がある場合は注意する。
- 11月頃には成虫は越冬場所に移動して越冬する。

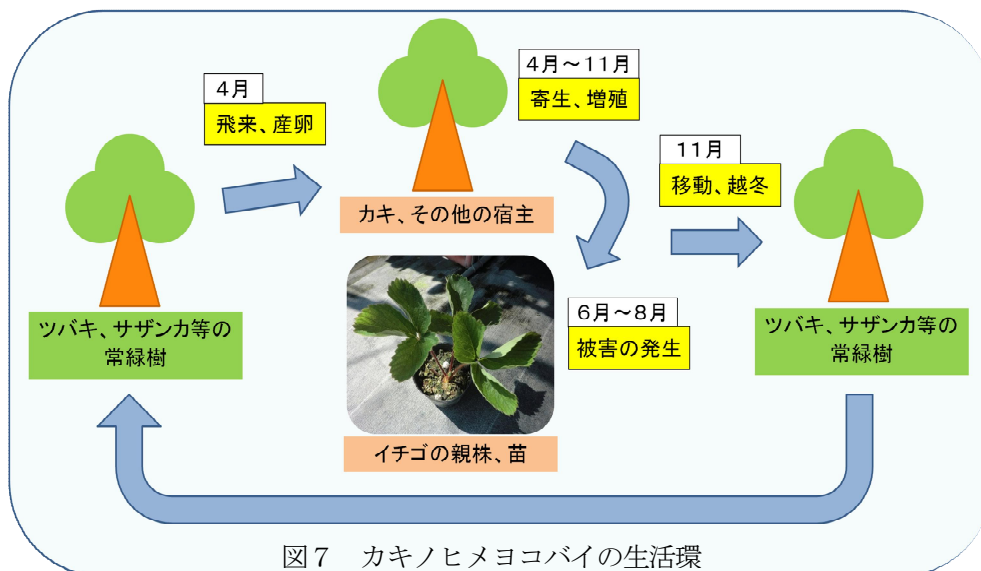


図7 カキノヒメヨコバイの生活環

### <カキノヒメヨコバイに適用される農薬>

薬剤名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	散布	収穫前日まで	2回以内

**農薬の登録使用基準を遵守しましょう！**